

都市近郊の山村の機能と変遷

— 埼玉県入間郡毛呂山町を中心として —

小 中 千恵子

(1) 研究の目的

本論文では、自然条件を不可欠とする山村と、人文的影響を大とする都市との接点である都市近郊の山村を取り上げ、両者の兼ね合いがどのような様相を呈して、当地域において人間生活にかかわっているのかを解明することを目的とする。

尚、研究対象地とした埼玉県入間郡毛呂山町は、東京都心から50Km圏に位置し、鉄道によって90分前後で、都心に結ばれている。そして東部は台地で、都市化の影響を受け住宅団地の造成が顕著であり、一方西部は秩父山地東端の低山性山地であり、古くからの林業地帯である。

(2) 研究の枠組

まず最初に地域の概観として、毛呂山町の都市化の影響を人文面において考察した。

次に林業地としての山地地域の変遷とその現状を把握し、本来の林業経営の姿を明らかにした。

さらに統計、聞き取り調査などから、生活環境の中での現在の毛呂山町山地地域の機能と、他地域への役割を抽出した。

最後に文献により、国内における山村の現況およびその動向を例に取り上げて、都市近郊の山村との比較を行ない、その特色を明らかにした。

(3) 研究の結果

林業は外材の輸入により国内材は不振であり、かつ林業労務者の減少により、商業的林業経営は停滞し、山林はいまや寝かせたままの状態にある。

総括的には、当地の農業は各戸バラバラで、耕作種目も景気によって随時変えていく商業的農業といえる。

山林、耕地を大規模に所有している農家は安定した専業農業を維持しているが、大部分の小規模土地所有農家は、農業は自給的で零細であり、兼業化は著しく進んでいる。

また小規模土地所有農家は、むやみに土地を捨てて離村することはないが、買い手さえあれば、割合簡単に売却してしまう。

山村の住民にとって、もはや山地は生活の基盤である土地ではなくなった。しかし都市に近いという立地条件ゆえ、現在でも離村する家は少なく、都市通勤者のための居住地として山村は存続している。

結局、全体社会内部の経済的分業において、今日の都市近郊の山村が担当する役割は、他地域へゴルフ場、自然公園などレクリエーション用地の提供、灌漑用水の供出、潜在資源の有効的保存等で、もはや山地住民には、山地の自然的資源の積極的生産は要求されていない。

しかるに、現在の都市近郊の山村は、大部分が都市通勤者の住民地と化し、老壮年層の農林業が谷幅の広い地区に残存しているという状況である。